

松野教授東京大学退官記念講演会の報告*

昨年5月18, 19の両日, 東京大学に於いて気象・気候力学に関する講演会が開かれた(主催: 東京大学気候システム研究センター)。これは, 前年秋に北海道大学に移られた松野太郎教授の東京大学退官を記念して企画されたものである。松野教授は長年に亘り東京大学理学部において気象力学の研究・教育に携わる一方, 近年は同大学気候システム研究センターの設立に尽力され, その初代センター長を勤められた。当日は第一線で活躍中の日本人研究者十余名が国内外から招待され, 興味深い講演を行なった。

そこで, 「天気」編集委員会では, 講演会に参加できなかった会員諸氏に当日の雰囲気や少しでもお伝えすべく, 19日の講演内容を解説記事として投稿して下さるよう7名の講演者に依頼した。以下, 執筆を承諾下さった4名の方の講演を特集した(順不同)。先ず, 宮原三郎氏(九州大学)には中層大気力学の未開拓分野の一つである中層大気循環の地磁気変動への影響について詳述していただいた。次に, 高橋正明氏(東京大学)には気候システム研究センターの成層圏モデリングの概要について, 特にその目玉とも言える赤道東西風の準二年振動現象の再現実験を中心に解説していただいた。更に, 山形俊男氏(東京大学)には, 最近の観測結果や高解像度数値モデルに見られる黒潮流量の季節変動を説明し得る新しい理論を中心に, モンスーンと海洋循環の結び付きについて概説していただいた。最後に, 山中康裕氏(東京大学)には, 長期気候変動を論ずる際に不可欠な海洋の深層循環に伴う熱や物質輸送について, 太古の海洋循環の様相まで含めて解説していただいた。

各執筆には30分の講演を自由な形式でまとめたいただいた。それ故, 執筆者によって長さがまちまちになってしまったが, これは講演内容の濃淡とは無関係であることを予めお断りしておきたい。より詳細をお知りになりたい読者は, 各稿末尾の参考文献を探っ

ていただきたい。いずれの解説も研究最前線のホットな話題に満ちている。その熱気が少しでも読者に伝えられるよう願っている。

ただ, 偶然にも, 「天気」の大多数の読者が最も興味を寄せていると思われる対流圏の現象についての解説は含まれていない。以下4つの解説は全てその「周辺」に関するものである。しかしながら, 広く地球環境の仕組みや成り立ちを理解し, その変動を把握して行く上で, 「周辺」分野に関する基礎知識は欠かせないものである。本特集が, これらの分野の理解を深める一つの機会を会員諸氏に提供できれば幸いである。

尚, 19日には上記4名の他, 新田勲(東京大学), 佐藤信夫(気象庁), 時岡達志(気象庁)の3氏(講演順)が招待された。新田氏は, 大気海洋系の10年スケールの変動について観測事実に基づき解説した。その詳細は現在気候システム研究センターにて刊行準備中の書籍に収録される予定である。また, 佐藤氏は観測データを数値予報モデルに組み込むための4次元同化システムについて解説した。これについては, 同氏により「気象の数値シミュレーション(気象の教室5)」(東京大学出版会)の中で概説されている。時岡氏は, 気象研究所の大気海洋結合モデルで再現された十年スケールの循環変動最新の結果について報告した。これに関する速報は昨年8月に同氏らにより「気象集誌」に発表されている。

また, 18日の講演会の内容は, 「気象力学から気候力学へ(気候システム研究叢書 No.1)」として既出版されているので, 興味を持たれた読者は直接出版元(〒153 東京都目黒区駒場4-6-1 東京大学気候システム研究センター)までお問い合わせ願いたい。最後に, 多忙の折貴重なお時間を割いて執筆くださった4名の講演者に厚く御礼申し上げますとともに, この企画に賛同し, 講演会の内容を特集記事にすることを快諾下さった現センター長住明正氏に感謝の意を表したい。

(担当編集委員: 中村 尚)

* Festschrift for Prof. Matsuno on climate dynamics.